



「Bくんに頼もう」「ええで！」
～友だちの得意やよさを遊びの中で活かすわけ～

12月12日(木)、5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

自然物を使ってミニクリスマスツリーや、壁面ツリーのオーナメントを作っている子どもが多くいました。自由に使える『材料ワゴン』には、花や枝、実などの自然物やモールや綿、キラキラな素材があり、選びやすいように、また、片付けしやすいように整理がされていました。



「これどう?」「ん～、僕はこっちにしようかな?」「それもいいね!」「私も同じのにしようかな?」と、遊びの目的をもち、楽しそうに素材を選んでいる様子がありました。

テーブルでは、毛糸を綺麗に巻き付けようと集中していたり、自分の作っているものを見せ合って「いいね～」と笑い合ったりしていました。

そして、保育室の片隅には、絵本が読めるスペースもあり、暖かな日差しを受けながら、好きな絵本を読んだり、時々近くの友だちと会話をしたりしていました。

そんな中、広告紙でくるくる棒を作り、それをハサミで切ろうとするA児がいました。

A:「硬った～。切られへん」「Bくんに頼もう!」

保:「なんでBくんに頼むの?」

A:「だってな、Bくんは力が強いねん」保:「なるほどね!」

A:「Bくん、これ切られへんねん。切ってくれる?」

B:「ええで。せやけどほんまに、これ硬すぎやん」

A:「せやろ。めっちゃ細く硬く作ったからさ～」

保:(やりとりを見て、子どもたちだけでは難しいと判断し、少し切れ目を入れ、再びBに渡す)

B:「いけそうや!切れた!」

A:「おお!さすがBくん。ありがとう!これでピザひっくりかえすやつ作れるわ」

B:「Aくん、ピザのやつ作ろうと思ってたんや!」

その後、【ピザをひっくりかえすやつ】を完成させたA児が、「できたで!」とC児に渡し、ピザ屋の遊びが再開していました。すると、「何してるん?」「僕たちも入れて!」とD児、E児も加わり、楽しそうな遊びから友だちの輪が広がっていました。

得意なことやそれぞれのよさを認め合う友だち関係と、それをそっと支える保育者のかかわりが、一人ひとりの自己肯定感にもつながっていることがわかりました。

やりたいことができる時間の中で、子どもたちは自分で考えたり、試したりすることを繰り返します。また、保育者や友だちと協力したり、相談したり、共感したりして、遊びや生活を充実させ、心を満たしていきます。その経験を積み重ねることは、「やってみようかな」という気持ちにつながり、遊びや活動に対する興味ややる気(意欲)となっていきます。これらは非認知能力であり、保育者(大人)から指示され、遊ばされているだけでは育ったり身についたりするものではないと思っています。



『好きなこと』ができる場、時間があるとともに、それを認め合えるクラスの雰囲気、友だちの存在、保育者（大人）のかかわりも重要になります。

そして、子どもたちの得意やよさを遊びの中で活かすことは、5歳児の発達段階に適した遊びや少し難しさを入れたりして、その過程を楽しんだり、達成感を味わったりしてほしいという保育者の願いも含まれています。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】では、『健康な心と体』『自立心』『協同性』『社会生活とのかかわり』『思考力の芽生え』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』と関連していることがわかりました。さらに、『遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”』がわかるエピソードであるとも思いました。